注意！

この作品はフィクションです。
左記の捏造設定が含まれていることをご留意ください。

・本編から数年後、各キャラクターの進路について。
（瀬々は就職、手嶋野と皆見は大学生）

・ユージンとヴィンスの関係性について。
（原作の特装版小冊子の内容をもとにした妄想あり）

あくまで筆者個人の想像としてお楽しみいただければ幸いです。
また、直接的な描写は控えていますが性的な行為をほのめかす記述がありますので、義務教育修了前のお子様の目には触れないよう、くれぐれもご注意ください。

「え、一人暮らしすんの？」
「ああ。そろそろ大学近くに住みたいと思って」
「実家からも通えなくはない距離じゃん。よくおばさんたち許してくれたね」
「バイト代貯めたのと、これから研究室や付き合いの飲み会で帰り遅くなることも増えるって話したら分かってくれた。奈々たちとも生活リズム合わなくなるし……」
「寂しがるだろうね」
「まあ、今は学校が楽しいらしいから大丈夫だろ。すぐ慣れる」
「んー……部屋探すとしたら最寄駅は一番町か川内？　その手前あたり？　俺も次の更新でそのへん検討中なんだけど」
「お、ついにか」
「そうなんだよー。もう隣のおっさんが留守の時ですらイビキと大音量目覚ましの幻聴が聞こえてくるくらいストレスやばくて」
「お疲れさん。わりと立地良いアパートだったのに運が悪かったな」
「本当それ。壁が薄いとは聞いてたけどあそこまでと思ってなかったんだよなー……似たような条件で家賃も予算内ってなるとなかなか見つかんなくてさ……かと言って職場遠くなるのは勘弁だし」

「あ、じゃあ俺と一緒に暮らすか？」
「えっ？」
「家賃折半したら少し割安になるだろ。大学にもそういう理由でルームシェアしてる連中いるぞ」
「や、でも、川内近辺でルームシェア用の物件ってそんな多くないんじゃ……空きがあるかどうか……」
「普通に２ＬＤＫとかで探せば良くね？　今も週一で家に入り浸ってんだから寝室以外は共用でも大して困らねえだろ」
「あー、まあ、そっか……」
「……嫌だったら別に」
「や、嫌ではない。全然、まったく、これっぽっちも嫌ではない。ただ……」
「ただ？」
「手嶋野は本当にそれで良いのかなと思って」
「良いんだから提案してんだけど。お前は小学生ほど早寝早起きするわけじゃないから、俺が夜遅く帰っても問題ないだろ？」
「はは……うん、そうね……」

「何、変な顔」
「気にしないで。ちょっと話がトントン拍子すぎてビックリしてるだけだから」
「ふーん……」
――そんな会話から数ヵ月後の現在、手嶋野は瀬々と同居している。
高校卒業後に二人は一度離れたが、一年制の専門学校で資格をいくつか取って戻ってきた瀬々が地元企業に就職すると、同じく地元の経済学部に進学していた手嶋野とよく会うようになった。進路が分かれた後も定期的に連絡は取り合っていたので、社会人と大学生とで立場が違っても、二人は高校時代とさほど違わない関係を今も維持している。
瀬々は高校を卒業したらすぐ働くことも考えたが、親戚の熱心なすすめがあって県外の専門学校に通うことを決めたらしい。手嶋野の方から詳しくは聞かなかったが、そんなに急いで大人にならなくてもいい、働きながら学ぶのは大変なのだから、欲しい資格があるならもう暫く学生のままでいなさい、と声をかけてくれる人がいたのだそうだ。
その気になれば大学も行けたかもしれないけど俺はこっちの方が合ってた。そう笑う瀬々の顔に嘘は無かったと、手嶋野は思っている。
二人が見つけたアパートは駅にもスーパーにも遠すぎず近すぎず、通勤や通学にそこそこ便利な立地だった。夜に酔っ払いが騒ぐこともない、落ち着いた住宅街の三階建て築浅

物件。ちょうど一階に空きが出たところで、家賃は一人あたり四万円ほど。なかなかの好条件である。

光熱費や食費、日用品の買い出しはどうするかなど細かいところをその都度相談しつつ、二人は春から共に暮らし始めた。食事は各自で済ませることが多いけれど、おかずが余れば相手の分をタッパーに入れて取っておくし、時間が合えば一緒に作って食べる日もある。今のところ大きなトラブルもなく順調で、日々とても穏やかに過ごせていると思う。

と、いうことを街中で偶然出会った皆見に話したら次のような反応だった。

「うーん……ついに来るところまで来たって感じだなあ」

「何が」

「二人の関係」

「は？」

一人で感慨に浸っている友人についていけず、手嶋野は戸惑いをそのまま声に出した。

皆見は別の大学に通っているが、今日は高尾とのデートのためにたまたま近くを通ったらしい。久しぶりだから楽しみすぎて、待ち合わせより一時間も早く着いちゃって……。そんなことを恥ずかしげもなく言い放った彼を手嶋野が最寄りのファーストフード店に誘い、小腹を満たしがてら互いの近況報告などしていたのである。

「どういう意味だよ」
「あれ、わかんない？」
怪訝な顔を向けた手嶋野に、皆見はきょとんと目を丸くした。わかんないから聞いてる、とポテトをかじりながらも真面目に返すと、相手も同じくポテトを口に運びながら、そうかあ、わかんないかあ、と苦笑した。
「二人は一緒にいすぎて感覚が麻痺してるのかもな」
「……俺と瀬々、何かおかしいか？」
「いいや。むしろ自然だよ。もっと早くこうなってもおかしくなかった」
「だから、それは、」
どういう意味なんだよ。手嶋野はそう続けようとしたが、皆見が手もとの方に目をそらしてしまったので言葉が途切れた。スマホの画面を見るなりパッと表情が輝き、訊かずとも彼女から連絡が来たのだとわかる。大方、もうすぐ着くよ、といった類いのメッセージだろう。
案の定、ごめん俺もう行かなきゃ、と皆見は空になったカップを片手に立ち上がった。手嶋野がそれ以上の質問を重ねる隙は無い。
「お幸せに。瀬々によろしく」

「え、ああ……え？」
「俺の分、嫌じゃなかったら食べといて！」
「もうあと三本しか……」
「じゃ！」
去っていく後ろ姿は幸せそうで、もう高尾のことしか頭にないのが見てとれた。開きかけた口を閉じた手嶋野はのろのろと卓上のトレイに目を戻し、たった三本を食べ切る時間も惜しかったらしい友人の置いていったポテトを、袋ごと手もとに引き寄せた。
前世の記憶がよみがえることも、かつての同級生たちに過去の面影が重なることも、最近はほとんど無くなっている。しかし、なぜか先ほどの「お幸せに」と「よろしく」は、ベロニカからヴィンスに向けられた言葉のような気がして胸がざわめいた。
主君の妻だった人。敬うべき姫君。あの御方はもうとっくに未来を向いていたのだなと、そんな当たり前の、わかりきっていたはずのことを、今さら確認させられたような気分だった。
「……まだいたのかよ」
店のざわめきに紛れるように、溜め息まじりで小さく呟く。颯爽と去ったベロニカからまるで置いてきぼりを食らったかのごとく、ヴィンスの心のかけらが手嶋野の中に残って

いる。

研究室での用事を済ませ、スーパーで食材を買って帰宅した。今夜は瀬々も一緒に食べると言っていたので鶏肉は二人分、それと小松菜と卵、明日の食パン。牛乳はまだあったはず、と冷蔵庫の中身を思い出しながら玄関に入ると瀬々が「おかえり」と顔を出した。

「ただいま。早いな」

「俺も今帰ったところだよ。それ夕飯？」

「ん。鶏肉の焼いたやつ、味付けどうする？　ケチャップソース？」

「醤油とみりんにちょっとだけ砂糖の……」

「照り焼きな」

「そうそれ」

「米、炊いてあったっけ？」

「昨日の残り冷凍してあるよ」

「じゃあそれでいっか。あと野菜スープの卵どうする？」

「落とし卵……うーん……いや、やっぱりふわふわで！」

「了解」

瀬々は洗濯物を仕分ける途中だったらしく、やりとりを済ませたらさっさと脱衣所に戻っていった。風呂場の手前に洗濯乾燥機が設置してあって、一人ずつ専用のカゴに洗濯物を放り込むシステムになっている。畳むときは各自の寝室に服を運ぶし、手洗いが必須のものは別にしてあるけれど、大抵は二人分を一緒くたに回してしまうのだ。

手嶋野は部屋着に着替え、手を洗い、キッチンに立った。切った野菜を煮込みながら肉を焼き、目分量で適当に味付けしている間も、ぼんやりと今日の皆見との会話を思い返している。

――もっと早くこうなってもおかしくなかった？

あれは、単純に同居のことを指していたのではない気がする。同居そのものではなく、そこに至るまでの心境というか、手嶋野と瀬々の変化について言及したのではないだろうか。

ボウルに卵を割り、菜箸でとき、ぐつぐつ煮立った野菜スープへ何回かに分けながら注いでいく。頃合いを見て火を止め、隣のコンロで焼いた鶏肉にもしっかりタレをからめておく。盛り付けの間に解凍が完了するように、取り出した冷凍飯を電子レンジへ入れてスイッチを押した。考え事をしながらでも手が動くくらいには、二人分の食事の支度に慣れてきている。

自分では、高校の頃から瀬々との関係は変わっていないつもりだった。けれど第三者から見ると違ったのかもしれない。皆見はそれを自然な変化だと――もっと早く変わっていてもおかしくなかったと、そう言ったのだ。

「うまそー！　いただきまーす」

気づけば食卓について夕飯を食べ始めていた。スーツを脱いでスウェット姿の瀬々は、着替えの際に多少乱れたとはいえ髪型だけがオフィス仕様にまとめられていて、何だかチグハグに見える。髪は高校時代より短く切られて大人っぽくなったけれど、たまに前髪を下ろした時の印象はずっと幼い。

表情も、話す声も、こいつは何も変わってないのにな。変わったとしたら、俺の方なのかな。手嶋野は向かいに座る同居人をじっと見つめた。

「何、そんなに見ちゃって……――あ、お酢？　照り焼きに少しお酢入れたでしょ。ちゃんと気づいたよ。前に俺がさっぱり味の方が好きって言ったの覚えてたんだね。ありがと」

「……あー、うん」

隠し味に気づいてほしくて見ていたわけではないが、説明するのも面倒で手嶋野は曖昧に笑って頷いた。すると、今度は瀬々が何か引っ掛かったようにこちらをじっと窺ってくる。

「手嶋野はさあ……俺の言ったこと何でも覚えてるよね」
「え、そうか？」
「一緒に住み始めてから俺が頼んだこと……つか、こうだと嬉しいな、助かるかも、程度で軽く言ったことまで全部、律儀に守ってくれてるじゃん」
「共同生活なんだからそこは普通じゃね？」
「理想はそうだけど、実際やろうとしてもなかなか出来るもんじゃないよ」
「そりゃだってお前は俺の……」
言いかけて止まる。俺の――何だ？　手嶋野は目の前の相手を見つめて動けなくなった。自分は何を言おうとしたのだろうか。
もはや主君ではない。かつての、王子と騎士という関係によって従っているわけではない。その認識はヴィンスのものであって、手嶋野は瀬々をユージンと同一視してはいないし、彼のために無理をしているわけでもない。ただ少しでも今の生活が心地好いものになるよう気をつけているだけだ。二人の暮らしに瀬々が安心感を覚えてくれれば自分も嬉しいし、そのために心を砕くことは苦ではない。相手の要望を難しいと感じればその場で断ったり、代案を出したりも出来る。手嶋野にとって、そうやって互いに落ち着ける居場所を作り上げていく努力はやって当たり前のものだ。

では、そういう相手を何と呼ぶのか。考えたけれど、友人という括りもしっくり来ない。どれだけ親しくとも同じ家に住むとなれば衝突することもあるだろうし、世間一般の親友が必ずしも自分たちのような距離感を持っているわけではないと、それは自覚している。わざわざルームメイトの細かな好みに合わせて料理をする義務なんか世の中には無いのだ。

ならば何か。手嶋野にとっての瀬々は。

「俺の……先輩だし」

結果的に口から出たのはそんな言葉だった。悩んだ時間はほんの数秒だが体感的にはもっと長い。瀬々は怪訝そうに眉を寄せて、せんぱい？　と聞き返してきた。手嶋野は神妙な顔で頷くしかない。

「そう。先輩。……仕事も家事も、お前の方が早く経験してる。自分より経験長い人間のアドバイスはちゃんと聞くべきだろ？」

「何それ真面目すぎ」

相手は苦笑したが、ふと思い至ったように目を伏せた。

「……真面目なのは昔からだったな」

穏やかだが少し低い、懐かしむような声。一瞬だけ昔の面影が浮かんだ横顔に、手嶋野はまた胸がざわめいた。

昼間、皆見にベロニカを感じた時のように、ユージンに対するヴィンスの心のかけらが疼いている――そんな感覚がある。

その後はテーブルに視線を落として、暫く黙って食事を続けた。途切れた会話をどう繋げばいいか分からなかったし、せっかく美味しく出来たのに、前世の残滓にかかずらって食事が冷めてしまっては残念だ。幸い、普段から無言が気まずくない仲だったのもあって、瀬々はそれ以上特に違和感を持たなかったのか何も言ってこない。

皆見に言われた件について手嶋野が再び口を開く気になったのは、食事の片付けも寝支度も済んだ深夜になってからのことだった。

ほろ苦い香りが鼻をくすぐる。職場のおばちゃんがノンカフェインコーヒーおすそわけしてくれたんだと言って、瀬々が手嶋野の分までカップをリビングに運んでくる。湯気の立つそれを受け取って椅子の背によりかかると、気分が落ち着いて、ありのままを話しても大丈夫かなという心持ちになった。

「今日、夕飯の時ちょっと考え事してたんだけど……」

「ああやっぱり？　上の空だったよね」

向かいに腰を下ろした瀬々が続きを促すように身を乗り出してくる。バレてたのか、そりゃそうだよなと一人で納得しながら少々気恥ずかしくなって、手嶋野はコーヒーを一口

飲んで誤魔化した。大したことじゃねーんだけど、と前置きをする。
「昼間たまたま皆見に会って、お前と同居してること話したんだ。うまくやってるって。そしたら、ついに来るところまで来た、って言われて……」
「へえ」
「詳しく聞く前に、高尾との待ち合わせだってどっか行っちまってさ。それで不完全燃焼。あいつの言葉がどういう意味だったのか気になって、ずっと考えてた」
「……俺は皆見の言いたかったこと何となくわかるよ」
「えっ」
「うーん、無自覚だったんだねえ」
瀬々は呆れたように、それでいてどこか楽しげに、目を細めていた。弟妹たちの幼い言動を注意しつつもつい可笑しくなって吹き出すのを堪える、そんな時の母の顔に、今の瀬々の表情はよく似ていた。
前世も現世も比較的円満な家庭で育った手嶋野は、そういう人の視線をよく知っている。本当は真剣に諭してやりたいけど可愛くて顔が緩んで仕方ない――……相手に深い愛情を持った人間の目だ。
よし教えてあげよう。居たたまれなさを感じ出した手嶋野に、瀬々がカップを置いて説

明を始める。
「手嶋野は俺にルームシェア持ちかけた時、女のことは想像しなかった？」
「女？」
「俺に彼女がいるかも、とか。逆に手嶋野に恋人ができても、俺と住んでたら連れ込みにくくなるよね。そういう不都合は考えなかった？」
「……瀬々、そういう相手いんの？」
「いねえよ。いるわけない。だからさあ、そこなんだよ」
「どこ」
「俺やお前が彼女作ること、一切考えもしなかったんだよね。気遣いと世話焼きの権化みたいな手嶋野が。それは何で？」
「何でって……」
世話焼きの権化と呼ばれたことよりも、改めて問われた内容で頭がいっぱいになる。
彼女を作る。部屋へ女を連れ込む。確かにこの年頃になれば珍しくはないし、実際に一人暮らしの恋人のもとへ入り浸っているという大学の同級生も何人か知っていた。
けれど手嶋野は、自分たちもいつかそういう相手が出来るかもしれないなどとは、たったの一度も考えたことがない。第一希望の大学に合格してからも弛まず勉学に打ち込んで

いたし、たまに疲れたら瀬々に連絡をとり、暇を見つけて会うのが一番の息抜きだった。瀬々がこちらに就職したばかりの時期は相手が体調を崩さないように何度も差し入れを持っていって話を聞いて、いつの間にか予定のない週末は共に過ごすのが当然になっていた。

もう王子と従者ではないのに。前世と切り離した、至極健全な友人関係を築いたはずなのに。

ずっとこれが普通だと信じていたのだ。瀬々との関係に疑問など感じたことがない。今更ここに他の誰かが入り込んでくるなんてあり得ない。

手嶋野は青ざめて唇を震わせた。

「……想像、できなかった」

「うん」

「俺、もう、お前以外と一緒にいる人生が想像できない」

言い終えて愕然と口を押さえる。

――今、何を言った？

「だよね」

とんでもなく重い言葉を吐いた手嶋野に、瀬々はひどく軽やかな口調で返答した。

「俺もだよ」

微笑んだ男が立ち上がって近寄ってくる。手嶋野は椅子とテーブルに縫い付けられたかのように動けない。口から出たのは間違いなく己の本心で、だからこそ衝撃は大きかった。
手首を掴まれてぐいっと引かれる。待ってくれと縋るように相手を見上げたが、男は射貫くような視線でその懇願を退けた。
「ここまで来たんだからもう逃げるな」
体が動かない。コーヒーの香りが強くなる。苦いキスだったはずだが、正直なところ手嶋野はその味をほとんど覚えていない。顔から火が出そうなくらい恥ずかしくて、掴まれた手も熱かった。

ヴィンスだった頃、ユージンに触れたいと願ったことは一度もない。願わずとも最も近い距離にいるのは己だという自覚があったし、生まれ持った身分の差と騎士の立場が壁となって、彼を見つめるヴィンスの目を塞いでしまったように思う。
ユージンは気難しくて皮肉屋だった。そのひねくれた性格が、殺伐とした宮廷によって後天的に作られたものだということにはうっすら気づいていたが、それに対する同情分を差し引いても扱いにくい男だった。ヴィンスは誰かの世話や手伝いをするのが割と好きな性分だったので、もっと素直にああしろこうしろと命じてくれたらいいのにと主の寡黙さ

に不満を覚えることもあれば、まあ昔からこういう御方だからなと諦観を持つこともあった。死ぬまで側に仕えるのだからいつかは良い方向へ変化するかもしれないと、慢心めいた希望を抱いていた部分も否定できない。

ずっと、生涯を彼の側で過ごすものと思っていた。そういうものだと信じていた。まさか、主を殺せと、本人から命じられる日が来るなど想像もしなかったのだ。

従者の分際を飛び越えて、友人としてぶつかることが出来ていれば良かったのだろうか。本音で語り合う関係を築けていれば、あんな悲惨な終わり方ではなく別の道も選べただろうか。――否、考えたところでどうしようもない。王子に対して身分不相応な働きかけをするなど、生真面目なヴィンスが己に許すはずがなかったし、責任感の強いユージンが立場の差を忘れてヴィンスにすべてを打ち明け、寄りかかるような振る舞いをするなど、それもまたあり得ないことだった。

どうしようもなかった。だからこそ悲しくて、悔しくて、心の中に残ったヴィンスのかけらがときどき手嶋野を苛んだ。

「もっと早くこうなりたかった」

相手の寝室に連れ込まれて肌も唇もひたすら貪られた後、強引な態度とは裏腹に髪を撫でる瀬々の手が優しくて、手嶋野は気づいたらそんな言葉をもらしていた。

瀬々は覆い被さったまま、うん、と相槌を打つ。好きなように触って口づけて散々こちらを乱しておきながら、最後の一線を無理やり越えるようなことはしない。俺にちゃんと選ばせようと、逃げ道を与えて待っているんだ――手嶋野はそう思って泣きたくなった。瀬々は、そういう我慢強さと優しさを持っている人間である。

一緒に暮らそうと言った時か、あるいはそれより以前から、彼はこうなることを理解していたのだろう。二人はもう離れては生きていけないし、互いよりも大切な相手など現れない。

「何でも話せて、隠し事もする必要がなくて」

「うん」

「お前の欲しいものも、やりたいことも、考えてること全部知りたかったし、頼ってほしかった」

震えた指先が瀬々の頬に触れる。互いを引き寄せるように再び唇が重なる。前世ではたどり着けなかった場所にようやく届いた。今までで一番、彼の近くにいる。それなのに顔がよく見えないのは、キスに溺れているからではなく、寝室の乏しい灯りのせいでもなく、自分の視界が涙でにじんでいるせいだ。

「どうしてもっと早く、……」

吐息の隙間で言いかけたそれを、手嶋野は途中で飲み込んだ。自分の方から口にしたのでは、どんな言葉を選んでも瀬々を責めるような伝え方になってしまうと気づいたからだ。

「手嶋野」

静かに名を呼ばれた。宥めるような優しい声で、瀬々はその先を引き継いだ。

「俺たち……あえて俺たちって言うけど、前世ではダメな主従だったよね。俺はまともに文句を言う機会すらお前に与えてやれなかったし、お前はいつも何か言いたげにするくせに表面ばかり従順なふりをした。最後までチグハグで噛み合わなくて、ずっと一緒にいたのにお互いをあまり理解できてなかった……」

言いながら瀬々が先に起き上がって手嶋野の腕を引く。向かい合ってベッドに座った二人は、どちらも髪はボサボサで、パジャマがわりのTシャツも乱れて、ズボンも腰骨のあたりまで下がっている。服の中に手を突っ込んであちこち撫でたり、Tシャツを引っ張ってあらわになった胸や首筋を好き勝手に舐めたり噛んだり、そんな数分前の記憶が一気によみがえって手嶋野は顔を伏せた。拒むどころか、これまで出したことのないような甘ったるい声で応じた己を思い出し、恥ずかしくて全身が熱くなる。

今の俺たちカッコ悪いよね。そう呟いて瀬々は笑う。前の俺たちはカッコつけすぎてたんだよ、とも。

「最近になってやっと気づいたんだけど、俺ね、お前の家族になりたかった。友達とか恋人とか兄弟とか……いろいろ考えたけど、全部ひっくるめて、何でもいいからずっと一緒にいられる相手。主従以外でさ」

家族。その響きがやけに耳に残って、手嶋野はそろりと視線を上げた。

身分が高くなればなるほど立場に伴う責任は重くなり、しがらみや争いが増え、時には家庭内にまでその問題が持ち込まれる。比較的円満だったエヴァレット家でさえ、家族全員が無条件に仲良しこよしではいられなかったのだ。まして王家で育ったユージンの苦悩はその比ではなかったろう。聞くだけで恐ろしい、嫌な記憶の方が多いくらいかもしれない。

それでも瀬々は、手嶋野との関係を表すのに家族という言葉を選んだ。ヴィンスだけは特別だったから、と。宝物のありかを告げる子どもみたいに声をひそめた。

「ユージンは、ヴィンスと二人きりの時はあんまり頑張らなくてよかった。苦しくなかった。俺たち対等でいるべきだったんだ。……でも実際はそういうわけにいかなくて、特に大人になってからは立場の差がそのまま壁になって、何も言えなかった……」

ぎしりとベッドが微かに軋む。手嶋野は知らず知らずのうちに膝立ちで手を伸ばし、目の前の体を抱き寄せていた。温かい。生きている。

自分たちは確かに一度死んだのだ。ろくな話もできず、隠し事ばかりで、相手の欲しいものも、やりたかったことも、その考えをまともに分かち合えないまま、ユージンとヴィンスが心から笑い合える日は来なかった。記憶の中の彼等はいつだって最も近い距離にいながら、感情を排除した理屈で互いを遠ざけていた。

ここまで長かったね、と瀬々が抱き返してくる。

「家族になってよ。今度こそ何でも話すし、ちゃんと大切にするから。……尚」

囁く声はまるで祈るように聞こえた。手嶋野はみっともない涙声で、もうなってるよ、と答えた。

毎日同じ家に帰って、時間が合えば食事を共にして、おやすみと微笑んで眠る。誰よりも安らぐ相手の隣が、今までもこれからも自分のものだと言える。

「稜」

その名を口にした瞬間から、胸の奥にわだかまっていた過去のかけらが溶けていく。もう何度目か分からないキスに飲み込まれるように消えた。

怒りも悲しみも血のにおいも、あの悲劇の全てを忘れはしない。理不尽に苦しんだ記憶を抱いたまま、それでも幸福になってみせるから、ただ静かに眠ってくれと願う。いつかの遠い日の彼等へ。

【瀬々稜 × 手嶋野尚】

本書は「ボクラノキセキ」の二次創作です。
久米田夏緒先生による原作及び関連する全てのものに関係はありません。
本文の複製・転載・転売等はおやめください。

発行者　久美子
X（Twitter）@kumikodachi
wie_wie_mail-fuyugomori@yahoo.co.jp

二〇二五年 十二月二十四日　発行
印刷・製本　製本直送.com